

白質脳症

英語名：Leukoencephalopathy

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ずしも起こるものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

大脳^{はくしつ}白質が主に障害されて生じる「白質脳症」は、医薬品によって引き起こされる場合があります。

主にカルモフル、テガフル、フルオロウラシル、メトトレキサート、シクロスポリンなどの抗がん剤で見られることがあるので、何らかのお薬を服用していて、次のような症状がみられた場合には、放置せずに医師・薬剤師に連絡してください。

「歩行時のふらつき」、「口のもつれ」、「物忘れ」、「動作^{かんまん}緩慢」などの症状

1. 白質脳症とは？

大脳半球の白質は、大脳皮質（「灰白質」とも呼ばれます）の神経細胞から出る神経線維から構成されています。この大脳白質が主に障害されるのが、白質脳症※であり、初発症状としては、「歩行時のふらつき」が最も多く、次いで「口のもつれ」、「物忘れ」が起こります。進行すると、様々な程度の意識障害が起こり、昏睡状態になることもあります。

副作用として「白質脳症」を起こす医薬品は、主に抗がん剤ですが、代表的な医薬品としては、カルモフル、テガフル、フルオロウラシル、メトトレキサート、シクロスポリンなどがあります（詳細は本マニュアルの最後にある別表を参照して下さい）。

※ 「B. 医療関係者の皆様へ」の図 1-3 の頭部 CT・MRI 画像を参照。

2. 早期発見と早期対応のポイント¹⁾

早期発見と早期対応のポイントは、①白質脳症の症状（表 1）があることを自覚する、②その症状が続く場合は担当医に連絡して、対応方法を検討してもらう、③担当医に連絡が取れない時は、医薬品の服用を中止し、できるだけ早く受診する、の 3 点です。「白質脳症」を含め、医薬品の副作用への対応としては、放置せずに可能な限り原因医薬品をできるだけ早く中止することが大切です。

また、「白質脳症」でみられる症状は、医薬品の副作用以外に病
気自体（脳卒中、悪性腫瘍の脳転移など）でも起こりますので、副作用で起きているのか、他の原因による症状であるのかを診断していただくことが大切です。症状が持続する時は、医師・薬剤師に連絡してください。もし、担当医以外の先生からも医薬品を処方され

ている場合は、現在服用している医薬品を担当医に伝えてください。

なお、「白質脳症」^{はくしつのうしょう}を検出する検査としては、脳波検査、頭部CT検査、頭部MRI検査の3つがあります。

表 1. カルモフル脳症 25 文献例および自験例の初発症状²⁾

初発症状	頻度 (%)
歩行時のふらつき	60
口のもつれ、言語障害、構音障害	28
物忘れ、認知症様症状	36
動作緩慢、無動	20
異常行動、精神症状	16
不随意運動、振戦	12
めまい	8
小字症	4
小脳性運動失調	4
物が黒く見える	4
手足のしびれ	4

* カルモフル脳症 80 例のまとめ³⁾では、「ふらつき・歩行時のふらつき・歩行障害」を合わせると 51%、次いで「口のもつれ・言語障害」が 16%の順になっています。

※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することができます。

<http://www.info.pmda.go.jp/>

